

〈資料 No. 1〉

75年2・6政治集会基調
主催・同大全学園
滋賀大経済学部自治会

(I)

ロシア革命の実現は、資本主義から社会主義への世界的規模での移行、世界プロ独運動を国際プロレタリアートに開始させた。ロシア革命の実現をもって帝国主義は、恐慌や帝国主義間対立——戦争を無政府的に展開することを制約され、国際帝国主義は、ワイマール・ベルサイユ帝国主義反革命世界体制を構築し、この矛盾から一層促進される資本の過剰と、この国際国内反革命体制を利用しつつ、これと一体に国内で管理通貨制を独占本位に構築し、独占利潤の確保と、国独資による新市場の創出によって恐慌を回避し、更なるプロレタリア人民に対する搾取、収奪によって一時的に拡散処理し、過剰資本を植民地に投下せんとした。この構造は、米・英・独帝の帝国主義相互の不均等発展の激化によるワイマール・ベルサイユ体制の崩壊、世界恐慌に伴う各国帝国主義の資本の過剰化、先鋭化の中で、米ニューディール、独ナチス経済、英仏連邦経済等として本格化した。このような経済体制は、大なり小なりブルジョア階級のプロレタリアートへの先制的反革命の勝利と一体的に構築された反革命経済体制であった。この特質は国際帝国主義の新たな環、諸階級闘争の焦点たる独で先行的にあらわれ、一九二〇年代後半から三〇年代の独階級闘争は文字通り革命と反革命の階級戦争期であった。独プロレタリアートは、これに対して民族解放社会主義革命とソ連継統革命(スタの粉砕に伴う)、或いは

あつた。

かかる体制を通じて米帝は、過剰資本を第三世界に投下し、新旧植民地体制をテコ入れて再編し、ここから吸い上げた超過利潤を西帝帝や日帝等に投下し、金融的支配を強めた。そしてこの犠牲の基底たる第三世界人民に矛盾を集中させたが故に民族解放社会主義革命を激発させたのである。後進国の破綻の焦点は原蓄の破綻にあつた。後進国権力と民族ブルジョアは、経済基盤を安定させようとすればするほど帝国主義との癒着を強めざるを得ず、帝国主義の援助の強化は、後進国の階級対立を激化させずにはおかなかつたのである。この矛盾の真只中からゲバラ・カストロをはじめとする中南米革命部隊が登場し、軍事反革命政権がこの反抗を米帝に代って鎮圧するものとして生まれたのである。アジアに於ても米ソ援助の内実は、民族ブルジョアジーの原蓄を保障するものではなかつた。農村経済を主体とし、過剰人口をかかえるアジア後進国の原蓄は、徹底した土地革命ぬきにはあり得ない。米帝の余剰生産物の買入れは外貨を喰いつぶし、先進国間の重化学工業製品貿易の拡大は、アジアの一次産品輸出を相対的に停滞させた。後進国の原蓄は破綻し、後進国内の階級対立は激化し、軍事政権は動揺を開始した。このようなアジア情勢の中で、ベトナム民族解放戦線は民族解放と共に土地革命をかかげ、米帝とカライイ政権に対する闘いを開始したのである。

新旧植民地体制下の矛盾の激発と、民族解放社会主義革命の前進は、先進帝国主義諸国にとって自らの過剰資本を処理し、同時に膨大な利潤を搾取する対象の喪失を意味するが故に、先進国では資本の過剰が慢性化し、五〇年代にはいつて開始された帝国主義の不均等発展による帝国主義間対立一なくずしの市場再分割戦に拍車をかけたのであ

他帝国主義国に於るプロ独社会主義と結合して、前段階決戦のプロレタリア革命戦争を組織することなく敗北し、独に於るナチス反革命の成立を転機として、帝国主義は民族抑圧、ソ連に対する反革命を含む帝国主義戦争に突入した。かくしてソ連共産党のスターリン主義への変質を起点に、プロ独社会主義革命、民族解放社会主義革命、根拠地化し継続革命からなる国際プロレタリアートの戦線はバラバラに分断され、帝国主義間戦争の中に包摂されていった。

(II)

かかる致命的敗北にもかかわらず、帝国主義間戦争の展開は、国際プロレタリアートをしてスターリン主義の枠を乗り越えつつ、中国革命を始めとする多くの民族解放革命と、即時的プロ独社会主義革命を前進させた。そして帝国主義間戦争の終了は、他面では国際階級闘争の前進と、これに対する反革命の激化を全面化させた。かかる中で国際帝国主義の盟主の地位を占めた米帝国主義と、他帝国主義は、第一次世界大戦後とは比較にならぬ程度帝国主義間対立に伴う世界市場の分断や、世界恐慌の爆発の回避を要求された。米帝は、三〇〜四〇年代の先行した重化学工業化、後進国市場の独占的支配を基盤として、IMF・GATTのドル本位制の通貨体制を構築し、そしてそれを基盤として諸帝国主義を結集し、国際反革命同盟NATO・安保を形成したのである。かかる反革命同盟は、プロレタリアート国家群と、各国のプロレタリアートを反革命抑圧すると同時に、他帝国主義を牽制する二重の政治的軍事的意味を持つていた。米帝国主義は、對他帝国主義、対プロレタリアート国家と各国プロレタリアートに対する反革命をその経済・政治・軍事力によって統一し、現代帝国主義の危機を突破し、自己の利益を貫徹する世界秩序ニヤルタ体制に再編したので

る。ヨーロッパにおいてもEEC結成を契機として停滞的發展しかとげられない米帝国主義と、急速に繁栄するEECとの抗争が開始された。この対立抗争はゴールドウォーに集中的に表現され、英帝はポンド危機に脅かされ、分割戦の開始はIMF機構の動揺を巻き起こし、帝国主義諸国間の政治的対立にまで発展した。これに対して米帝はドル防衛を基軸とするIMF機構の防備強化によって動揺する世界資本主義を再び米帝のヘゲモニーの下に防衛せんとした。この枠組の中でとられた戦略がEEC解体であり、ケネディラウンドに他ならない。この経済政策の上に、米帝の核戦略を主軸にすえた中ソ包囲の軍事同盟の強化を計るのが米帝の政治的軍事的戦略であった。この米帝の世界戦略の具体化がヨーロッパに於る多角的核戦略によるNATOの再編であり、アジアに於る日米反革命同盟の軍事力強化であった。だが六三年以降の過程は米帝の目指す帝国主義世界再編の限界を暴露し、五八年から開始された帝国主義の不均等発展・分割戦をいよいよ鉄の必然性をもって貫徹する過程であった。ケネディラウンドによるEEC関税障壁の正面突破も形骸化し、不均等発展は政治的対立をはらみつつ後進国市場への分割戦、勢力圏確保競争の激化へと帝国主義諸国をかりたてていく中で、七一年八月ニクソン新経済政策によってIMF体制そのものが崩壊するに至つたのである。

こうして戦後の帝国主義世界体制は、第三世界民族解放社会主義革命の前進の中でその基底を破壊され、又帝国主義をそれ自身の内部矛盾たる不均等発展の激化の中で決定的な動揺・崩壊にひんした。米帝を軸とする帝国主義世界体制の崩壊に対して国際帝国主義は、新たな資本蓄積の体系を提案することができないが故に、米帝に対して反抗しつつもこれと妥協しつつ、この蓄積構造と国際反革命体制を再編強化

していく以外に延命の道はない。かかる米帝を軸とする不安定極まる国際帝国主義の妥協的連合は、結局その危機を昂まりゆく三ブロック人民の世界革命の闘いを圧殺しつつ、更に一層、第三世界人民と資本主義国プロレタリア人民に矛盾を転嫁し、犠牲をしいる以外にブルジョアの解決を見出せないのである。

(三)

一七年ロシア革命の勝利以降、帝国主義の包囲下でロシア共産党は、プロ独を強化し社会主義経済を建設し、同時に自国を世界革命の根拠地化する巨大な課題を要求された。しかしながら二〇年代を通じて国内のクラーク、都市小ブル、ネップマン等の台頭と資本主義勢力への屈服、ポーランド追撃戦の敗北、ドイツ革命の敗北、帝国主義の包囲網強化の中で国際帝国主義に対する妥協屈服という情勢の中で、一國社会主義論、スターリニズムがロシア党内闘争に於る左翼反対派の敗北を経て、六回大会でコミンテルンの世界綱領にまで高められた。コミンテルン六回大会路線は、世界恐慌を基礎とする世界革命の波の高揚に対して肉迫する姿勢を一応保持しつつも、一國社会主義論、世界同時革命の政策、或いは全般的危機論の定式等の根底的限界性故に、このスターリン主義綱領に指導された国際階級闘争は、三二年の独共産党の敗北を経て、ブルジョアジーの全面的な勝利——プロレタリア革命の全面的な敗北として収束したのである。かかる二〇年代後半から三〇年代中期に至る国際階級闘争の敗北の結果として右翼日和見主義のコミンテルン七回大会路線が提出され、仏、スペインの反ファッショ闘争の高揚に拜跪した統一戦線戦術の採用（人民戦線戦術）、スペイン革命の絞殺、そしてソ連の米英帝との妥協（カイロ会談、ヤルタ会談）として国際的な帝国主義との妥協屈服の体制としてしあげら

対的に独自の道を拓いた。帝国主義とそのカイライ政権（蒋介石）に対する武装闘争の完遂を「人民戦論」と「新民主主義論」によって成し遂げ、それをもってヤルタ体制を拒否し、四九年の国内戦の勝利をもって中国人民を解放し、そして第一次インドシナ解放闘争、朝鮮解放闘争へと結合、外延化していくことに成功した。国内に於ては、労働者と農民の革命的独裁に基く人民民主主義を創出し、五六年生産手段を共有化し（集団所有を含む）、社会主義革命への連続革命を歩み、「プロ独下の階級闘争論」を打ち出し、中ソ論争を媒介にしてソ連社帝の修正主義路線と闘い、プロレタリア文化大革命を実現し、九全大会、十全大会、批林批孔運動と一貫して、反帝反社帝のプロレタリア共産主義革命の路線を前進している。中国共産党は、階級、国家、民族の連関に於る原則的立場がはつきりせず、世界戦略に於る米帝以外の帝国主義を免罪し、小ブル民族主義的人民民主主義革命を支持する中間地帯化戦略を保持する点で限界性をもっているが、総体的に見れば、第三世界の民族解放社会主義革命を支持し、社会帝国主義と真向から対決し、連続革命と根拠地化の闘いを推し進めている点で国際共産主義運動に於る「指導的」役割りを果している。

ベトナム労働党、朝鮮労働党は、世界革命の最前線に常に戦い抜き、継続革命と根拠地化の闘いを推し進めている点で、はつきりとこれを支持しなければならぬ。

(四)

インドシナ人民の闘いを始めとする三ブロック人民の闘いの前進の中で、又これを契機とする新植民地体制の崩壊、IMF体制の崩壊、通貨戦争の激化、不均等発展の矛盾の激化という七〇年前後する戦後帝国主義世界体制の崩壊と帝国主義の体制的危機の深化の中で、米

れていった。そして大戦終了後帝国主義とソ連の冷戦状態が形成され、その中でソ連は東欧諸国を属領化していったのである。五三年スターリン死後五六年スターリン主義の総括の中から、都市小ブル、資本主義勢力をバックにフルシチョフの体制間矛盾論——平和共存——議会を通じた権力の平和移行——経済競争等の現代修正主義の体系が提出された。いわゆるフルシチョフ路線、スターリン批判路線は、スターリン主義の否定、レーニン主義の復活ではなく、スターリン主義の現代版として社会帝国主義への変質をより一層推し進めるものであった。経済的にはソ連経済の利益を代弁した資本主義的分業の固定化する社会主義分業体制論や、利潤率の導入、価値法則の導入や、資本——賃労働関係の復活の容認、資本主義勢力とプロレタリアートの貧富の増大等、国家資本主義に変質していった。六二年のブレジネフ・コスイギン指導部の登場もならフルシチョフ路線を清算するものでなく、無階級社会論に基くソ連全人民国家論の宣言がなされ、国際的には援助という名の下での原料・資源の略奪、第三世界の権益の占有、軍事基地確保、シオニズムへの援助と「戦争でもなく平和でもない状態の創設」、反革命ロンノル政権の承認、五八年のチェコ侵入等、一層社帝路線を推進するものであった。国内的には農業不振、経済成長の停滞、そして国家資本の中に過剰が生じ、その過剰資本が第三世界やメコン諸国に援助という名の下に搾取・収奪の為に資本輸出されている。今やソ連社会帝国主義は、国際帝国主義の後退を補填して、この体制的救済をかざしつつ、これと一体に全世界に武装反革命をもって帝国主義的侵入を行い、米帝と結託してプロレタリア世界革命を圧殺せんとしている。

中国共産党は、コミンテルンとその諸党の帝国主義への屈服とは相対的に独自の道を拓いた。帝国主義とそのカイライ政権（蒋介石）に対する武装闘争の完遂を「人民戦論」と「新民主主義論」によって成し遂げ、それをもってヤルタ体制を拒否し、四九年の国内戦の勝利をもって中国人民を解放し、そして第一次インドシナ解放闘争、朝鮮解放闘争へと結合、外延化していくことに成功した。国内に於ては、労働者と農民の革命的独裁に基く人民民主主義を創出し、五六年生産手段を共有化し（集団所有を含む）、社会主義革命への連続革命を歩み、「プロ独下の階級闘争論」を打ち出し、中ソ論争を媒介にしてソ連社帝の修正主義路線と闘い、プロレタリア文化大革命を実現し、九全大会、十全大会、批林批孔運動と一貫して、反帝反社帝のプロレタリア共産主義革命の路線を前進している。中国共産党は、階級、国家、民族の連関に於る原則的立場がはつきりせず、世界戦略に於る米帝以外の帝国主義を免罪し、小ブル民族主義的人民民主主義革命を支持する中間地帯化戦略を保持する点で限界性をもっているが、総体的に見れば、第三世界の民族解放社会主義革命を支持し、社会帝国主義と真向から対決し、連続革命と根拠地化の闘いを推し進めている点で国際共産主義運動に於る「指導的」役割りを果している。

ベトナム労働党、朝鮮労働党は、世界革命の最前線に常に戦い抜き、継続革命と根拠地化の闘いを推し進めている点で、はつきりとこれを支持しなければならぬ。

第一に、中国共産党は、継続革命、根拠地化の闘いを更に推し進め、帝国主義と社会帝国主義に真向から対決し、第三世界民族解放闘争の側に立つことを全世界の前に明らかにした。

第二に、ベトナム・インドシナ人民の革命戦争は一貫して堅持され、前進し続けており、都市に孤立しているチュ・ロンノルのカイライ政権は、今や都市の反政府運動の激化によって危機にさらされている。第三に、日帝の極東——アジアの大規模な資本投下と超過利潤確保

していく以外に延命の道はない。かかる米帝を軸とする不安定極まる国際帝国主義の妥協的連合は、結局その危機を昂まりゆく三ブロック人民の世界革命の闘いを圧殺しつつ、更に一層、第三世界人民と資本主義国プロレタリア人民に矛盾を転嫁し、犠牲をしいる以外にブルジョアの解決を見出せないのである。

(III)

一七年ロシア革命の勝利以降、帝国主義の包囲下でロシア共産党は、プロ独を強化し社会主義経済を建設し、同時に自国を世界革命の根拠地化する巨大な課題を要求された。しかしながら二〇年代を通じて国内のクラーク、都市小ブル、ネップマン等の台頭と資本主義勢力への屈服、ポーランド追撃戦の敗北、ドイツ革命の敗北、帝国主義の包囲網強化の中で国際帝国主義に対する妥協屈服という情勢の中で、一国社会主義論⇨スターリニズムがロシア党内闘争に於る左翼反対派の敗北を経て、六回大会でコミンテルンの世界綱領にまで高められた。コミンテルン六回大会路線は、世界恐慌を基礎とする世界革命の波の高揚に対して肉迫する姿勢を一応保持しつつも、一国社会主義論、世界同時革命の政策、或いは全般的危機論の定式等の根底的限界性故に、このスターリン主義綱領に指導された国際階級闘争は、三二年の独共産党の敗北を経て、ブルジョアジーの全面的な勝利—プロレタリア革命の全面的な敗北として収束したのである。かかる二〇年代後半から三〇年代中期に至る国際階級闘争の敗北の結果として右翼日和見主義のコミンテルン七回大会路線が提出され、仏、スペインの反ファッショ闘争の高揚に拝跪した統一戦線戦術の採用（人民戦線戦術）、スペイン革命の絞殺、そしてソ連の米英帝との妥協（カイロ会談、ヤルタ会談）として国際的な帝国主義との妥協屈服の体制としてしあげら

対的に独自の道を拓いた。帝国主義とそのカイライ政権（蒋介石）に対する武装闘争の完遂を「人民戦線論」と「新民主主義論」によって成し遂げ、それをもってヤルタ体制を拒否し、四九年の国内戦の勝利をもって中国人民を解放し、そして第一次インドシナ解放闘争、朝鮮解放闘争へと結合、外延化していくことに成功した。国内に於ては、労働者と農民の革命的独裁に基く人民民主主義を創出し、五六年生産手段を共有化し（集団所有を含む）、社会主義革命への連続革命を歩み、「プロ独下の階級闘争論」を打ち出し、中ソ論争を媒介にしてソ連社帝の修正主義路線と闘い、プロレタリア文化大革命を実現し、九全大会、十全大会、批林批孔運動と一貫して、反帝反社帝のプロレタリア共産主義革命の路線を前進している。中国共産党は、階級、国家、民族の連関に於る原則的立場がはっきりせず、世界戦略に於る米帝以外の帝国主義を免罪し、小ブル民族主義的人民民主主義革命を支持する中間地帯化戦略を保持する点で限界性をもっているが、総体的に見れば、第三世界の民族解放社会主義革命を支持し、社会帝国主義と真向から対決し、継続革命と根拠地化の闘いを推し進めている点で国際共産主義運動に於る「指導的」役割りを果している。

ベトナム労働党、朝鮮労働党は、世界革命の最前線に常に戦い抜き、継続革命と根拠地化の闘いを推し進めている点で、はっきりとこれを支持しなければならない。

(IV)

インドシナ人民の闘いを始めとする三ブロック人民の闘いの前進の中で、又これを契機とする新植民地体制の崩壊、IMF体制の崩壊、通貨戦争の激化、不均等発展の矛盾の激化という七〇年前後する戦後帝国主義世界体制の崩壊と帝国主義の体制的危機の深化の中で、米

れていった。そして大戦終了後帝国主義とソ連の冷戦状態が形成され、その中でソ連は東欧諸国を属領化していったのである。五三年スターリン死後五六年スターリン主義の総括の中から、都市小ブル、資本主義勢力をバックにフルシチョフの体制闘争論—平和共存—議会を通じた権力の平和移行—経済競争等の現代修正主義の体系が提出された。いわゆるフルシチョフ路線⇨スターリン批判路線は、スターリン主義の否定⇨レーニン主義の復活ではなく、スターリン主義の現代版として社会帝国主義への変質をより一層推し進めるものであった。経済的にはソ連経済の利益を代弁した資本主義的分業の固定化する社会主義分業体制論や、利潤率の導入、価値法則の導入や、資本—賃労働関係の復活の容認、資本主義勢力とプロレタリアートの貧富の増大等、国家資本主義に変質していった。六二年のブレジネフ・コスイギン指導部の登場もならフルシチョフ路線を清算するものでなく、無階級社会論に基くソ連全人民国家論の宣言がなされ、国際的には援助という名の下での原料・資源の略奪、第三世界の権益の占有、軍事基地確保、シオニズムへの援助と「戦争でもなく平和でもない状態の創設」、反革命ロンノル政権の承認、五八年のチェコ侵入等、一層社帝路線を推進するものであった。国内的には農業不振、経済成長の停滞、そして国家資本の中に過剰が生じ、その過剰資本が第三世界やメコン諸国に援助という名の下に搾取・収奪の為に資本輸出されている。今やソ連社会帝国主義は、国際帝国主義の後退を補填して、この体制的救済をかざしつつ、これと一体に全世界に武装反革命をもって帝国主義的侵入を行い、米帝と結託してプロレタリア世界革命を圧殺せんとしている。

中国共産党は、コミンテルンとその諸党の帝国主義への屈服とは相対的に独自の道を拓いた。帝国主義とそのカイライ政権（蒋介石）に対する武装闘争の完遂を「人民戦線論」と「新民主主義論」によって成し遂げ、それをもってヤルタ体制を拒否し、四九年の国内戦の勝利をもって中国人民を解放し、そして第一次インドシナ解放闘争、朝鮮解放闘争へと結合、外延化していくことに成功した。国内に於ては、労働者と農民の革命的独裁に基く人民民主主義を創出し、五六年生産手段を共有化し（集団所有を含む）、社会主義革命への連続革命を歩み、「プロ独下の階級闘争論」を打ち出し、中ソ論争を媒介にしてソ連社帝の修正主義路線と闘い、プロレタリア文化大革命を実現し、九全大会、十全大会、批林批孔運動と一貫して、反帝反社帝のプロレタリア共産主義革命の路線を前進している。中国共産党は、階級、国家、民族の連関に於る原則的立場がはっきりせず、世界戦略に於る米帝以外の帝国主義を免罪し、小ブル民族主義的人民民主主義革命を支持する中間地帯化戦略を保持する点で限界性をもっているが、総体的に見れば、第三世界の民族解放社会主義革命を支持し、社会帝国主義と真向から対決し、継続革命と根拠地化の闘いを推し進めている点で国際共産主義運動に於る「指導的」役割りを果している。

ベトナム労働党、朝鮮労働党は、世界革命の最前線に常に戦い抜き、継続革命と根拠地化の闘いを推し進めている点で、はっきりとこれを支持しなければならない。

インドシナ人民の闘いを始めとする三ブロック人民の闘いの前進の中で、又これを契機とする新植民地体制の崩壊、IMF体制の崩壊、通貨戦争の激化、不均等発展の矛盾の激化という七〇年前後する戦後帝国主義世界体制の崩壊と帝国主義の体制的危機の深化の中で、米

——政治経済的侵入——新植民地体制のテコ入れの策動は、燃え上る反日闘争の嵐によって打ち破られ、破綻を深めている。とりわけ米日「韓」極東反革命体制の要である「韓国」の経済的破綻、朴政権の危機は、ニクソン・キッシンジャー戦略の最大の基盤をゆるがしている。

第四に、ニクソン・キッシンジャー戦略の一環としてのパレスチナ・アラブ政策が、第四次中東戦争をテコとしてシオニズム・イスラエルを侵略反革命橋頭堡とし、この下に反動王制勢力を結集し、石油の安定確保とパレスチナ・アラブ革命の庄殺をはかるものであったが、イスラエル軍力の相対的低下と、産油国の石油攻勢にあり、急拠エジプト、サウジアラビアの反動王制勢力とブルジョア民族主義の結合を支柱とし、カダフィ等小ブル急進民族主義やP.E.L.P等の民族解放社会主義革命の勢力の分解・孤立化を狙い、和平——「パレスチナ国家案」を提起しているが、シオニズム粉砕、和平粉砕、パレスチナ・アラブの完全解放をめざす闘いの前に挫折は明らかである。

第五に、米帝は、ドル切り下げ、S.D.Rの採用等の譲歩をかりつつも、全体的にはドル本位制の維持を自論んだだけであるが、これは、西欧帝や、日帝の過剰ドルの規制、S.D.Rの拡大、変動相場制の採用や、更なる外貨規制の強化などで反撃を受けている。総体として米帝E.C、日帝の不均等発展の激化と平準化が拡大し、ニクソン・キッシンジャー戦略の対先進国戦略の破綻は明確であり、民族解放闘争の前進による植民地体制の動揺は、更にそれが帝国主義相互間のせめぎ合いの拡大へとはね返り、国際通貨体制は益々空洞化し、これに応じてなし崩しのブロック化が進展し、世界統一市場の分断化傾向が増大せざるを得ない。他方では、過剰生産——過剰資本の矛盾の爆発、恐慌を回避する為、「有効需要の促進」という名の財政、公共、軍事対外

好況の中で設備投資につぐ設備投資を繰り返しつつ、六五年の過剰生産恐慌の発現に至るまで高度成長を実現していった。この中で日本独占資本主義は、三菱・三井・住友・富士・三和・第一勧銀等、旧財閥系の巨大銀行を中心にしながら各融資系列ごとにコンツェルンを創出し、金融寡頭制が典型的に形成されていった。

また日帝ブルジョアジーは五二年日米平和条約と安全保障条約に調印し、日帝の復活が即米帝からの自立と日米間の政治的対立に発展するのではなく、米帝と共同しつつ競走する競合関係を基調に、アジアの国際革命勢力に対峙する反革命侵略最前線にして大兵站基地として復活されたのである。

この高度成長の最大の基盤をなしたのが労働者の低賃金であり、そのメカニズムは顕在的潜在的な過剰人口を構造的に創り出すことにある。この為に国家権力は、農民の80%を農業だけでは生活を保てない貧農以下とした程の零細農耕制の存続と、三割農政といわれる国家による下層農民の放逐政策を基礎にしていた。又ドッジラインの大量占資本は常用労働者を搾取・収奪し、その労働条件を保障せず、職業病や労働災害を強い、高度成長の中で名目的な賃上げを許容して合理化を強要するパターンの総評・民間の春闘方式を組織労働者に強いていた。又本工の引といわれる賃金を強いられている臨時工、社外工を多用し、中高年齢層のプロレタリアを排除し、低賃金の若年労働者を利用した。中小零細下の労働者は、独占の矛盾を転嫁された中小零細

援助の拡大を展開し、米帝の輸入インフレに相乗化された猛烈なインフレを引き起させつつ、他方では、各国の蓄積、再生産構造の改造が要求され、これらの負担が全てプロレタリア人民に転嫁されるが故に、先進国内部の階級危機を引き起こさざるをえない。

このような世界情勢は明確に三ブロック階級闘争——プロレタリア国家の継続革命根拠地化、後進国民族解放社会主義革命、先進国プロ独社会主義革命の条件を成熟させており、現代帝国主義の危機の深化は、世界プロ独——世界共産主義の物質的基礎を成熟させ、まさにその歴史的使命を終らんとしている。

日本帝国主義の動向

(I) 日本帝国主義の復活と第一次高度成長

朝鮮戦争の特需ブームを契機に、資本蓄積の金融的基礎を創り出した日本資本主義は、米帝からの技術の導入、老朽設備のスクラップ化と新規模の更新を行いつつ、重化学工業部門の育成に重点を置く産業構造の転換を行わんとした。この日本資本主義の近代帝国主義への自己改造は、農地改革と農村の階級分解から引き出される農民のプロレタリア化に基く安価で豊富な労働力、国際帝国主義世界体制の新植民地体制に基く安価な石油をはじめとする原料・資源の入手、或いは米帝からの技術の導入、農村の資本主義化に基く国内市場の創出、米帝に保障された対外市場の一定の拡大等の諸要因、政治的には安保体制と日本資本主義階級の保守合同による自民党結成等の支配階級内部の統一の獲得、社会党——総評の体制内化と労働運動の最右翼全労の育成、日本共産党の現代修正主義化等の諸要因に基いて成功裡に展開されていった。こうして日本資本主義は五六年神武景気、五八年鍋底不況、六〇年六一年岩戸景気と好況と小恐慌をはさみつつ全般的には

資本の矛盾を更に二重に転嫁されてゆく為に一層ひどい労働環境におかれた。そして臨時工、社外工、中小企業プロレタリアのプールとして窮民といわれる下層労働者を都市最低辺に滞留させ、より一層搾取した。臨時工・社外工・出稼ぎ農民・季節工、中小企業の未組織労働者、窮民層等、下層労働者の最大の犠牲の上に日本帝国主義の強蓄積はなされていった。この下層労働者の中に在日アジア人や、被差別部落大衆が組み込まれ、在日アジア人は、日帝支配階級が伝統的に養ってきた民族差別を集中的に受け、又被差別部落民は就職、結婚、教育その他全ゆる面でも不当な差別にさらされていった。中(上)層労働者の、合理化と引きかえに若干の賃上げを獲得する春闘方式の労働運動への包摂と矛盾の累積と、そして組織から排除された膨大な下層プロレタリアートの文字通りの無権利な賃金奴隷の状態、これ等こそが高度成長の対極に形成されたものであった。

(II) 日本帝国主義の第二次高度成長

日本帝国主義の五五年〜六〇年初頭にかけての高度成長は一頓座し、新しい強蓄積の条件を整えて再前進する一結節点を迎えざるを得なかった。それは六四年六五年の過剰生産恐慌の表面化に象徴されていた。六四・六五年の過剰生産恐慌は、五五年以来国内市場の開拓を対象にして成長を続けてきた日本帝国主義が、国内市場面での限界に達し、過剰生産恐慌をひきおこしたものであった。これは中小企業の倒産——山陽特殊鋼や山一証券の破産や、独占の生産調整等の事態となつて現れた。しかしかかる事態を前もって予測していた池田——佐藤らは、六二年以降「開放経済体制の確立」と称して、資本自由化と国際市場侵入をめざして万全の対策をもつて臨み、日本人に危機感すら与えることなく乗り切つたのである。日帝は独占の大型合併を

続々と行い、製鉄部門の大型化をはかり、製鉄部門を中核として日本沿岸地帯一帯に一大重化学コンビナートを創り出し、他方では自動車造船・電機・化学部門等を近代化し、米帝から輸入した技術をもとにして二次防、三次防、四次防計画を立案し、兵器の国産化をめざして軍需産業を創出していった。又エネルギー部門に於る不効率な石炭や石炭部門や生糸や綿糸の紡績部門をスクラップ化し、これに代わって大型タンカーや石油産業を開発し、合織産業に置きかえたりした。かかる驚異的な重化学工業の躍進を支えるべく、通信部門の合理化・拡大化、鉄道の新幹線化や拡張、航空運輸の開発、三里塚空港の建設、道路拡張、土地の造成、企業への重点融資、労働・教育・社会福祉・都市・農漁民政策等、独占本位の一大国独資政策を展開し、ドツデライン以来の緊急通貨政策を大巾に転換していった。それにベトナム特需の享受を最大限利用していった。

労働部門では、米国仕込みのラインアンドスタフ制や、作業長制度を導入し、一層激しく合理化を推し進め、臨時工、社外工、下請工等に対する搾取・収奪を強化し、そして六四年には全労を中心にして「労資協調、非政治主義の反共労働運動」の一大部隊としての同盟会議を結成した。更にこの中核米御用労働運動 A.F.L. C.I.O. の指導下にある国際金属労連の動きかけに応じた鉄鋼労連を始めとする関係労組は、この日本協議会 (I.M.F. J.C.) を組織していった。そして独占の労働者の上層・管理層の育成、中級技術労働者の育成の為に教育再編、マスプロ教育が進行し、産学協同路線が強化されていった。

農業部門に於ては、六一年農業基本法が成立し、農業の「構造的改善」の美名の下に農民の離農政策がとられ、それは六四年の「総合農政」や六〇年代後半の減反減収、「新全給」「日本列島改造案」へと

出が、タイ・インドシナ人民や南朝鮮人民の反日闘争の高揚の中で従来通りの安易な形で続行することに限界をきたし始めたこと。第三に米帝を軸とする国際帝国主義経済体制の基底たる第三世界の植民地体制がインドシナ人民の解放闘争の勝利的前進や、アフリカ・アラブの闘いの中で半ば崩壊し、そのことによって国際帝国主義の経済的基底が解体し、今まで米帝の力と第三世界への犠牲転嫁によって隠ベイヤれていた帝国主義諸国間の不均等発展とその不均衡性が激化し、それ故市場分割戦が激化していること、その中で「不均等発展」世界恐慌「不均等発展」帝国主義間戦争」を回避しなければならぬという至上命令をつきつけられている現代帝国主義は、どの帝国主義も米帝に代って自国通貨を世界通貨としつつ、自己のヘゲモニーの下に帝国主義世界を再編する諸条件をもち合わせていないが故に、米帝に反発しつつも、妥協屈服し、米帝中軸の帝国主義世界体制を再編維持せざるを得ない。とりわけ日帝は、米帝の矛盾を転嫁され、更に E.C 諸国の集中攻撃を受けざるを得ないこと。第四にかかる日帝への経済矛盾転嫁と、国内の資本蓄積の条件を創出する国独資政策によるインフレが加重され、労働者人民に対する搾取・収奪・抑圧し続けられていたプロレタリア人民が押さえがたい力で反抗を開始しはじめたこと。労働運動は七三・七四春闘と従来の労働運動の枠をはるかに超えて進展し、又部落解放運動への広範な部落大衆・労働者人民の結集、在日アジア人の闘い、山谷・釜ヶ崎に代表される下層プロレタリアートの闘い等、諸階級人民の闘いがあらゆる領域で開始され始めたこと。かかる事態の中で、日帝支配階級は如何なる延命の方策を考えているのか。

第一は、日帝の高度成長を支えた侵略・抑圧・反革命の体系を別個のものに転換することができない故に、日帝は七〇年代の現状に見合

発展していった。漁業部門に於ても大独占漁業産業からの駆逐的攻撃これに合わせた「公害」の全面化によって没落は必然だった。

対外的には六五年「日韓条約」をメルクマールとして資本輸出の拡大、本格的な海外経済侵略を開始し、朴軍事政権へのテコ入れ、六五年九・三〇以降のインドネシア・スハルト政権へのいち早くの援助開始等、カライイ政権へのテコ入れと東南アジア支配の布石として、アジア開銀、農業開発基金、アジア民間共同会社等の国際機関、国際会社を設置し、更に東南アジア開発閣僚会議、東南アジア農業開発会議、東南アジア運輸通信会議、アスパック等に於る指導権を獲得せんとし、日帝は東南アジアに於て米帝と並ぶ利害を形成した。そして日帝独自のアジア侵略は、アジアに於る民族解放闘争の前進という局面にあって、米帝の戦術的後退——ニクソン・ドクトリンに沿った形で日米革命同盟の再編・強化——七〇年安保、七二年沖繩「返還」五・一五体制としてアジア侵略反革命を推進していったのである。

以上の如き、国際国内蓄積を強行することによって、日帝は六〇年代後半未曾有の活況を呈し、GNP 世界第二位に至る発展を行ったのである。

(III) 日本帝国主義の高度成長の破綻とその延命の道

——侵略反革命——なし崩しファシズムの絶望的暴進

だがこの驚異的な繁栄は決して永遠のものではなかった。日本帝国主義の強蓄積——高度成長の過程は、帝国主義の不均等発展——平準化を促進し、又国際階級闘争の前進はそれを可能にしてきた諸条件を消滅させたのである。第一に日本資本主義の成長を支えた石油をはじめとする原料・資源の入手が、第三世界の窮乏と反抗の中で困難になり始めたこと。第二に東南アジアを始めとする第三世界への商品資本輸出

つてこの構造を再編し、維持強化しなくてはならない。原料・資源がいかに高騰しようと、それを入手せざるを得ないし、市場が不安定であるうと資本輸出を一層推進し、過剰資本を解決していかねばならない。又帝国主義間の国際競争の激化に対しては、国際競争力を強化し、不利な諸条件をカバーしていく以外にない。かかる経済戦略を實現していく為には、金融寡頭制を一層強化し、労働者人民に一層の犠牲を転嫁せざるを得ないのである。

政治的には、米帝国主義の新植民地体制の維持・再編強化に全面的に協力し、極東に於る日米反革命体制を再編強化しつつ、その中で日帝独自のアジア侵略反革命を強行せざるを得ない。

第二にはそれ故に激化する労働者人民の国際的・国内的反抗に対してこれを抑圧する強力ななし崩し的ファシズムの体制が強化されてゆくこと。日帝支配階級は、一方では民族差別、部落差別等を利用して差別分断支配体制を強化し、更に帝国主義労働運動の育成を通じて「共」を社会排外主義として確立し、これらを差別分断支配体制に組み込み、ブルジョア権力機構を支える基盤を拡大強化すると共に、他方に於てはいまや従来の統治形態ではこの情勢の根底的転換を目指しているのである。そしてそれに先行しての司法の反動化、警察機構の肥大化やブルジョアマスコミをも動員しての市民社会末端に及ぶまでの治安管理体制の強化、或いは破防法体制により先鋭な反革命によって革命的左翼を弾圧する等のなし崩しファシズム化の全社会領域での完遂を目論んでいるのである。

現在の帝国主義の体制的危機の深化の中にあつて、その巻き返し、日米両帝国主義の極東に於る戦略再編の要としてあつたのが昨秋のフオード米日訪「韓」であつた。即ち七一二年米帝の戦術的撤退と戦

略ハゲモニーの下で、沖繩「返還」—日帝の対「韓」資本投下急増と政治経済支配の強化—朴の三選を一連の諸環とする米日「韓」極東反革命体制再編強化と日中国交回復、七・四南北共同声明とソ社帝の極東反革命軍事侵出として始つた極東に於ける戦略的再編は、金大中氏ラ致事件以来の朝鮮人民の反米反日反朴闘争—民族解放—南北統一闘争の発展と「韓国」政治危機と日「韓」関係の動揺、軌レキと展開してきた。フォードの手直し再巻返しは、このぐらつき動揺する米日「韓」極東反革命体制を再編強化し、同時に妥協的連合とせめぎ合いに転化している国際帝国主義体制を米帝の利害、ヘゲモニー、覇権の下に再統合する道を更なる日帝への矛盾の転嫁から追求することである。この要こそ米帝の極東戦略軍事力強化と、日帝の慢性的過剰資本の更なる対「韓」投下、その飛躍的増強とそれと一体たる「韓国」民衆の反日反朴闘争—南北朝鮮人民の反米反日反朴—民族解放自主統一闘争に対する日帝の政治的軍事的正面对決、反革命抑圧への命がけの飛躍に他ならない。日帝はEC諸国の如く独自の勢力圏を持たず、アジア「社会主義」諸国に包囲されていることから、米帝との反革命同盟を強化しつつ、独占—金融寡頭制を再編強化し、プロレタリア人民に犠牲を転嫁し、更に何よりも慢性的に構造化する過剰資本の極東、東南アジアへの再投下—汎ゆる制約、桎梏にもかかわらず、なし崩し的に「円」勢力圏を拡大する攻勢を追求せざるを得ず、それには全重心を傾けての全世界への資本—商品輸出拡大の追求に向わざるをえない。その環こそ「韓国」である。だがこの事は日帝にとつて命がけの飛躍である。それは継続革命—根拠地化の闘いを進めるアジア「社会主義」諸国と、増々民族解放—社会主義の力を強める民族解放闘争の嵐に対する正面对決—政治的軍事的対決と、それと一体

—国内権力再編に対し、三ブロック階級闘争の結合と、世界プロ独—世界共産主義に結合し抜く世界革命の路線の下に、又これを継続革命—根拠地化と民族解放社会主義革命戦争と結合する日帝打倒—プロ独社会主義革命を闘い取らねばならない。

総括・任務

我々のこの間の闘いは、何よりも、我が同大学生運動内部に巣喰つていたところの、徹底した日和見主義、経済主義者であった「現中研一派」の放逐と、それを媒介したところの、現在の革命的左翼内部の「混迷と停滞」を止揚する作業であり、そのための組織の飛躍をかけた闘いであった。彼ら「現中研一派」は「革命主義反対」を唯一の合言葉として、我が革命的左翼が70年代を前後する日本階級闘争の激闘の中で、はつきりとプロレタリア人民に提起した「プロレタリア国際主義と組織された暴力」の内実を一切精算し、自らの小ブルヒューマニズムを現実の階級闘争に即目的にアテハメ、個別闘争のツギハギによつて自らを延命させてきた。しかしかかる傾向は何も「現中研一派」にとどまるものではない。我々がかつてブルジョアジーに公然と闘いを宣言したとき、我々が提起した綱領—組織—戦術の総体を、ある部分は、彼らが小ブルヒューマニズムによつて感情的に把握した「プロレタリアート」との「連帯」なる至少な永遠の主体形成主義にすりかえ、また我々の闘いの指針であった「プロレタリア国際主義と組織された暴力」は、彼らの手によつて「純プロ主義の誤り」「小ブル性の克服」なるうす汚れた方針の下で、階級関係を捨て去つたブルジョア改良主義的な、単なる総体としての概念にすぎない「人民」の中へという、いわば現代ナロードニキ主義的な論理の中で自己完結させられた。そして「人民に奉仕する党」などという、レーニン

たる国内反革命抑圧の飛躍的強化—なし崩しファシズム化と国際—国内プロレタリアート人民への更なる犠牲加重なしにはあり得ない。とりわけ「韓国」に対して一層大規模な資本投下と一体の南北朝鮮人民の反米反日反朴闘争—民族解放、南北自主統一の闘いに対する徹底した敵対、南北分断の一層の固定化と、「韓国」民衆の反日反朴闘争—民族民主革命の政治的軍事的鎮圧、朴政権の死守と、北部共和国に対する政治的軍事的対抗、在日朝鮮人民の反日反朴闘争に対する弾圧破壊攻撃である。この米日「韓」極東反革命体制の再編強化と、「韓国」を犠牲的基底とする日帝のアジア侵略の再編の強行的貫徹、これこそフォード来日・訪「韓」の真の意図である。

しかし、この米日間帝国主義的反革命的飛躍は、極東に於る革命と反革命の激突を呼びおこさずにはおかない。アジア「社会主義」三國の継続革命—根拠地化の闘いの前進と左への旋回、南ベトナム—南部朝鮮を基軸とする民族解放闘争—プロレタリアートの進出と社会主義革命に連続化する民族民主革命の発展、そして日本に於るプロレタリア革命戦争の条件の一層の成熟、更にこの三ブロック階級闘争の結合。フォード来日訪「韓」を皮切りとする米日「韓」の重層的極東反革命体制再編強化—なくずシファシズムの大攻勢と恒常的全般的な内向的危機—階級危機の激化は、一切が権力問題に集中される時代の到来を告げている。全ての政治勢力はこの一点に於てドラマチックに自己の階級の本質を明確にせざるをえない。既に帝国主義ブルジョアジーは権力再編に進み出しており、日共修正主義、社会主義協会も民主連合政府路線等の社会帝国主義の本質をあらさまにし、中間ブルジョア政党的分解と再編も不可避である。革命的左翼は、この国際

が「党と階級を混同する誤り」と表現した、まったくもって組織の日和見主義と、それ故の戦術・綱領問題における日和見主義におちいるのである。これらブルジョアジーに身売りした現代ナロードニキ主義者は、階級闘争の後退局面ではとりわけ悪質な存在として機能する。この様な部分こそ、ローザルクセンブルグが「頹廢した立場」と語り、トロツキーが「ブルジョアジーのエプロンのヒモに結びついている退化的俗物」と語り、レーニンが「ブルジョアの心理に無力に屈服し、ブルジョア民主主義の立場を無批判にとり入れ、プロレタリアートの階級闘争の武器を鈍らせている。」と語つた徹底した日和見主義、経済主義であり、我々の過去の闘いに対する文字通りの精算主義の核心である。我々のこの間の闘いは、彼ら精算主義者との闘いであり、これは我々の階級的任務を鮮明にする中から、彼らに対する我々のプロレタリア的な分岐をなす血染めの一戦として貫徹された。

我々はこの様な観点からこの間の革命的政治闘争を積み重ね、我々の階級的任務原則的立場を復権させんとしてきた。「原則的な政策こそ唯一の正しい政策である。」かかる立場を我が立場とせんとしたのである。かつて共産主義運動の歴史の中で多数者の意見あるいは党の一時の利害がプロレタリアートの根本的利害と食い違つた瞬間が時々あった。そういう場合レーニンはためらうことなく断固として党の多数者に反対して原則性に味方してきた。

1909—1911年の時期、それは反革命によつてうちやぶられた党が完全な分解を経験していた時期である。それは党に対する不信の時期であり、インテリゲンツィアばかりでなく、一部には労働者さえもが党から全般的に脱落していった時期であり、地下活動の否定の時期であり、解党主義と混乱の時期であった。当時はメンシエヴィキ

ばかりでなくボルシェヴィキもまた大部分は労働運動から遊離して、た数多くの分派や潮流をなしていた。周知のように地下活動を完全に精算し労働者を合法的な、自由主義的なストルイピンの党に組織しようという思想が発生したのは、まさにこの時期である。レーニンはその時、全般的な傾向に屈せず、党派性の旗を高くかかげた一人の人であつて、彼は、バラバラにされ、うちのめされた党の力を、おどろくべき忍耐と比類のない頑固さをもって結集し、労働運動の内部のありとあらゆる反党的潮流に反対して闘い、比類のない勇敢さと、いまだかつてないねばりついで党派性を固守したのである。

1914-1917年の時期、帝国主義戦争の最盛期、それは、すべてのあるいはほとんどすべての社会主義的政党が、全般的な愛国主義的熱狂に屈服して、祖国の帝国主義に身をゆだねて奉仕した時期である。

それは第二インターナショナルが資本の前にその旗をたれた時期であり、ブレハノフ、カウツキー、ゲードその他のような人々さえもが排外主義の波にもちこたえることのできなかつた時期である。レーニンは当時、社会排外主義と社会平和主義に対して断固たる闘いをおこし、ゲード一派やカウツキー一派の裏切りを暴露し、どつちつかずの「革命家」の中途はんばさに烙印をおした唯一の人であるいは、ほとんど唯一の人であつた。レーニンは自分の背後にわずかな少数しかもっていないことを理解していたが、そのことは彼にとつて決定的な意義をもつものではなかつた。なぜなら彼は一貫した国際主義の政策こそ将来性をもつ唯一の正しい政策であることを知っていたからである。

「原則的な政策こそ唯一の正しい政策である。」——これこそ、そ

が我々に提起するという意味にも、どちらにも解することが出来る。」我々は、前者の経済主義者の理解から決して自由ではなかつたし、我々の主体の一定の拡散を招いてしまつた。我々は、この間、この我々が直面した新たな困難性、いや、これにぶつかることによつて露呈された我々の根底的限界性を止揚する作業を推し進めてきた。我々は同大に於ける戦線の二重化、重層化を推し進め、内部に於ける組織再編の一定の成果をもつて、2・6政治集会を提起し、大衆運動学費闘争からの目的意識的分離をなさんとしたのである。

大衆運動学費闘争が提起した「新たな政治上、組織上の任務」(これは「同大学費闘争中間総括」に於いて提起されている)それは、学費闘争の中に如何にして目的意識性を持ち込むのかという問題である。我々は、60年代後半に於ける「個別学費闘争と全人民的政治闘争との結合」「安保決戦を日帝打倒・世界革命戦争へ」として体现された闘いの意義を評価しつつも、そこに於ける「政治過程論」的な運動論的把握の限界性を確認しなければならぬ。この限界性によつて我々は多くの精算主義者を生み出してしまった。革命的情勢の下では、彼らは歴史のふるいにかけれられクズ箱に棄てられてしまう。しかし「革命的精神の衰退」の時期には、彼らが「沼地へ行く」と大合唱をしてゐる。我々は「自然発生性へのおのれの拝跪によつて運動の成長を妨げる人々に対しては他ならぬ偏狭の精神を身につけなければならぬ」

「およそ運動の自然発生性のまえに拝跪すること、およそ意識的要素の役割、社会民主党の役割を軽視することは、とりもなおさず——労働者に対するブルジョアイデオロギーの影響を強めることを意味する。」かつて帝国主義戦争の時期に於いて日和見主義者は社会排外主義に

の助けによつてレーニンがプロレタリアートの最良の分子を革命的マルクス主義の側に獲得しながら、新しい「難攻不落」の地位を突撃によつて占拠したところの定式である。72年以降の革命的左翼内部の一定の「混迷と停滞」という現在の状況が、このレーニンが直面した党と革命勢力の危機と極めて類似したものと捉握することが出来るだろう。「日和見主義との完全な訣別、労働者党からの日和見主義の駆逐の時期は無条件に熟している。」我々は、はっきりとこのことを確認し、「混迷と停滞」の革命的精算、革命主体の危機の突破をなさんとしてきた。

我々のそのような作業は、11/18-21フォード闘争として結実化され、全国の革命的同志と共に、日「共」、カクマル等の社会排外主義者をもとより、新旧人民戦線派との明確な分岐を勝ちとつたのである。しかしながら我々のこのような闘いは多分に不充分性を有するものであつた。それは、我々が自らの革命主体としての飛躍を全学闘大衆戦線の質的深化の延長線上に設定するという我々の組織日和見主義であり、結果として大衆運動主義であつたということであり、更には、全国的な統一戦線(日学戦)の質的不明確さと、単に政策レベルの意志統一の域を出なかつたということである。

この不充分性は、12月以降、同大学費闘争の高揚の中で一層明らかにならざるを得なかつた。「大衆運動が任務を規定するということ」を二とおりの意味に理解することが出来る。即ちこの運動の自然発生性の前に拝跪するという意味がつまり社会民主党の役割を、あるがままの労働運動への単なる奉仕に帰着させるという意味にも、またこの大衆運動が発生する以前の時期にはそれで足りていた任務に較べて、はるかに複雑な、新しい理論上、政治上、組織上の諸任務を、大衆運動

転化した。現在の過渡期世界に於ける帝国主義権力のなしくずしファシズムの総攻撃の前に現在の日和見主義者はブルジョアジーの軍門にくたりつつある。我々は彼らとの階級的分岐を鮮明にし、彼らとの断固たる党派闘争の推進をもつて我々の隊列の純化と強化をはからなければならぬ。「結合する前に、また結合するために、まずきつぱりと明確に分界線を引くことが必要である。」

4月学費闘争の高揚を4・28政治集会へ!

学費闘争中間総括 同大全学闘争委員会

学費闘争を革命的に闘い抜いている全ての同志諸君! 12・5全学大会の圧倒的勝利をもつて開始された戦闘的同大学生運動による学費闘争は、同志社ブルジョアジーの今回の学費値上げ攻撃にかけた以下のような意図——

①同志社大学の田辺移転—二部廃校を軸とする「大同同志社五万人構想」の実施に向けた先どり攻撃であり、このための同大教育資本の蓄積攻撃である。

②移転に向けた実質化攻撃として、松山超反動体制下に於ける学生部(北垣、渡辺)を主要な担い手とした、学内の右翼的権力再編、管理支配の強化の攻撃及び戦闘的同大学生運動への介入攻撃との有機的連関を有するものである。

③最近のうちつづく教育の帝国主義的再編の一環として「筑波法」の全圍化に向けた実質化攻撃と、筑波——中教審路線の更なる完成化をなさんとする日帝ブルジョアジーの攻撃と明白につながるものである。

これらの意図に対して、主要には学費値上げ白紙撤回/田辺移転二部廃校——大同志社構想粉碎/教育の帝国主義的再編——中教審、筑波路線粉碎/筑波実質化阻止の中軸的スローガンをもって表現し、かつ学生大衆に対する徹底した暴露を行ない、これを学費闘争に結果する諸戦線の独自領域に於いて組織化するなか、常時数千名の学友を結集せしめ、当局——松山学長に対する大衆団交を公然と要求した。

12・13 对松山大衆団交集会は、大衆団交の場から逃亡した松山を糾弾し、数千名による戦闘的デモ、とりわけキャンパスに乱入した機動隊との大衆実力闘争として闘われ、この12・13 闘争の次元に於いて「学費値上げ阻止」という経済闘争として、大衆の自然発生的運動として開始された我々の学費闘争は、独力で帝国主義国家権力を学生大衆の前に引きずり出すことをもって、権力との緊張——対峙關係を創出し、また大学当局——ブルジョア国家権力との運動発展段階に於ける「現象的な全面対決」に突入したのであり、この段階に於いて、一個別経済闘争としての学費闘争は一面的政治性を外的に付与され、全面闘争への端端的な相互媒介的連結環を、いわばその一面の運動構造のなかで獲得したのである。この12・13 闘争の大衆的・戦闘的大爆発に恐怖した同大ブルジョアジーは、12月14日よりの全学休講措置を発令し、また後期試験のレポートへの切りかえをもつて、高揚する学費闘争を学生大衆から分断し、各個撃破せんと目論んだのである。だが、かかる同志社ブルジョアジーのワイ少な闘争圧殺策動は、1・10 对松山大衆団交要求集会の圧倒的勝利により、その一点を完全に突破した。全

の段階の発展を保障するのである。「大きな敗北こそ、革命的諸政党と、革命的な階級に、本当のきわめて有益な教訓、歴史の弁証法の教訓、政治闘争をどう行なうかということの理解と、手腕と、術についての教訓を与えるものである。」(レーニン「左翼小児病」)

それでは我々は今、何をなすべきなのか。

そして我々が直面しているのはいったい何なのか。第一点として確認しなければならないのは、諸戦線に於ける「組織化」の任務の、内的質の高度化である。即ち、従来の「組織化」の様々、多分に自足的な組織拡大を目的とする組織化のみではなく(諸戦線に於ける闘争基盤の原則点を踏まえた上で)学費闘争の中に於ける獲得目標(現段階に於いて、これまでの闘いの総括を踏まえて、何を目的として組織化を行なうのか。)と任務方針を明白に把握しつつ、諸戦線の更なる強化をはからなければならないのである。この様な作業こそが、前述した一面的運動構造の、重層的な運動構造への弁証法的発展と転化の内的環を獲得する第一歩であり、同時に学費闘争を個別経済闘争の円環運動として収束させぬために、我々が常に視座に捉えておかねばならない任務なのである。即ち、自然発生的な個別経済闘争という学費闘争の中で、諸戦線の中核として機能する部隊(それは、この間の学費闘争の発展過程に於いて、萌芽的に形成されつつある)は、運動局面に於いては必然的に政治的中核として強化されなければならないのである。この中核の諸戦線の内部に於ける、指導的ヘゲモニーの強化を通して、諸戦線の中核部隊とその独自運動領域の内部、そして同大学生運動による学費闘争の現段階に於ける、戦闘的中核として把握される「全学実行委」レベルでの諸戦線の結集体と、これによって指導される自然発生的な大衆による大衆運動一般としての、学費闘争の運動体

学休講攻撃にもかかわらず、七百名をはるかにこえる戦闘的学友の結集で、堂々と貫徹された1・10 闘争の意義は、正当に評価されなければならない。サークル・寮の部分の組織的決起と共に、多くの学友のクラス・ゼミ・更には専攻学科からの大衆的・組織的決起の勝利的進展(運動論的な次元での組織化の意味に於いて)を、我々は再度確認し、更に戦線の強化をはからなければならない。

だが、学費闘争のこの様な圧倒的な高揚が、真の大衆的な基盤の下で闘いとられつつも、我々の全学ストライキの形態をとった闘いは、同志社ブルジョアジーの「正常化」攻撃の中で、学費闘争の圧倒的ヘゲモニーを確立できぬまま入試を迎え、更には「四月」に流れこまんとしている。そして現実の痛苦な展開として、「第一次学費」は粉碎されなかつた。何故なのか?我々は現時点に於いて再度、学費闘争の現段階を検証し、すでに開始された当局——権力との全面対決を更に推し進めつつ、学費闘争の中間的な総括を提出しなければならぬ。

第一に、我々は学費闘争の現段階に於ける中間総括の把握として、我々の学費闘争の運動発展の過程の一段階に於ける、部分的・段階的敗北として総括しなければならぬ。即ち、この敗北は敵に対する全面的な敗北ではなく、とりわけ学費闘争の運動発展過程に於ける、我々同大学生運動の運動組織論的敗北であり、それ故の戦術的敗北である。言いかえればこの敗北は、自然発生的大衆運動の圧倒的な高揚が、同大学生運動の戦闘的中核(或いは、学費闘争の次元に於ける、諸戦線内部の中核体と、その連合体としての全学実行委)の従来の指導性のワクを超えた次元に発展したことを意味しているのである。我々は今、学費闘争の現実の進展を明確に見すえ、この「敗北」の総括を断固として行なわなければならない。この様な作業こそが、運動の次

との、重層的な構造の内外に於いて、二重の意味に於ける指導と被指導の、相互媒介的連結環としての運動構造をつくりだし、これを「組織」の次元にまで高め上げ、そこに於いて学費闘争の中で、不断に決起してくる部分に対する明確な政治方針の提出を、学費闘争総体のいわば戦略——戦術にまでかわる問題として、なし切らなくてはならないのである。即ち言いかえらるならば、全ゆる階級闘争の戦略——戦術問題に於ける重大点である「計画としての戦術」の観点からの「戦術の組織化」と、これへの戦略的捉え返し、更にはこれを保障する組織——綱領——戦術の全般的な、有機的連関關係の把握という任務を我々の学費闘争の立場から検証し、捉え返すことである。ここに於いて我々は、戦術とは当面の任務、階級闘争の一部面のための手段の体系であり、戦略はそれらの結合・成長により、闘いを勝利へと導くべき諸行動の、結合した体系であることを確認しなければならない。この確認点は重要である。このことを踏まえて、我々は運動が、自然発生的に発展している局面に於いて、不断に陥りがちである、経済主義的立場を断固として、退けなければならない。我々が不断に陥りかねない経済主義的立場とは、いわゆる戦術的任務を、ただ日々の問題に専念する、部分的な戦術しかない「日常運動」の中に解消することである。更にこの様な立場は、日常闘争が全ての注意を奪い、それ自身の戦術上の慣例をつくり出し、闘争に於ける「全体」が「客体」との有機的連関から切り離された所で自己運動し、そこに自足的な運動の継続のみを、運動の中に於ける「主体形成」と合体させた、経済主義の個別円環運動——永遠の主体形成の円環運動が、完成するのである。このような次元で行なわれる運動は、組織の自足的な同心円の拡大、運動自体としての運動、自己目的としての運動の自足的継続として、

またそれ故、運動の自足的発展のために、必然的に、なし崩しの、即自的な戦術の左傾化として、帰結せざるを得ないのである。ここに於いて、この経済主義的立場といったものは、全ゆる問題に対する、プラグマチックな対応と、それに見合った形で公然と行なわれる。不断に決定してくる大衆に対する、明確な政治方針を抜きにした引き直し、或いはその対極的表現である「大衆運動」に名をかりた、露骨な大衆追随主義に陥ってしまったのである。我々は、かかる経済主義的立場を、断固として退けなくてはならない。自然発生的に不断に決起する部分に対する、明確な政治方針の提出と、その前提としてある指導と、それを担う組織の問題が、今こそ我々に提起されているのである。「プロレタリアートは、マルクス主義の諸原則による、彼らの思想的統合が、幾百万の勤労者を一つの労働者階級に融合される組織の、物質的統一でうち固められていることよってのみ、不敗の勢力となることができる。」(レーニン「一步前進、二歩後退」)このような観点抜きにしては、我々が次に総括すべき課題、即ち、いわゆる個別経済闘争の、全人民的政治闘争との結合、自然発生的闘争の、目的意識的闘争への転化の問題を、何ら一切語ることはできないのである。

個別経済闘争が、自然発生的な運動の発展のまま放置されるならば、この闘いは持続することができず、一定の自然発生的高揚段階をすぎると、個別円環運動として自己完結し、必然的に従来の大衆運動の、個別的レベルに収納され、その結果として、闘争組織は大衆運動の、個別の運動体に解体され、闘争総体が解消してしまう。このような事態に対し、即自的に「政治性」を意味付与し、また戦術を左傾化させてみても、大衆運動に対する、無内容なひき直しとしてしか、現象的に機能することしかできないのである。ここに於いて、個

別経済闘争の全人民的政治闘争との結合と、自然発生的闘争の目的意識的闘争への転化という課題が、我々に提起されてくるのである。では、かかる課題は我々の学費闘争の現段階に於いて、如何に総括と任務の提出の作業の中で、物質化されなければならないのか。我々の学費闘争は、前述した如く、当局——権力との全面対決の次元に突入した。しかしながら、この「全面対決」は、現段階に於いては運動の圧倒的な自然発生的展開により、同大当局との全面対決が闘い取られているにせよ、権力との対決の次元に於いては、まだ一面的な「全面対決」であり、全的な真の意味での「全面対決」ではない。即ち、まだ真の内的質を有した、権力との全面対決には至っていないのである。現段階に於いては、当局を即自的な媒介にした、権力との外的な一面対決でしかないのである。このような段階に於いて、ストリートに政治闘争との結合・転化を語ることはできないし、かりに語れば、そのような政治闘争は「一般的政治闘争」であり、小さくまとまった「行政的政治闘争」の、自己目的としての追求にしかすぎず、また運動局面に於いては、大衆運動に対する「引き直し」として機能することは、前述した通りである。このような「行政的政治闘争」は、経済闘争、政治闘争という、重層的な内実をもった、革命的権力闘争を導き出すことはできないのである。

学生運動の中で明確に位置づけ、この同大學生運動を、更に学生運動総体の中で捉え返し、更に日本階級闘争の現在の展開の中で、階級闘争の一翼を担うものとしての学生戦線という、学生運動の本質的な把握の観点に立つて、日本階級闘争との全般的な相関関係との有機的連関を認識し、それを我々の学費闘争の中で、再度物質化するということである。つまり、学費闘争の downward 回帰の過程の貫徹と、再度の回帰 upward 過程を、運動の即自的段階から、向自的段階への上昇的転化の発展過程としてなし切ることである。我々は、学費闘争の同大學生運動の内部に於ける位置づけと、学生運動総体との位置づけをなし切ることから、日本階級闘争の中に於ける、同大學生運動と学生戦線総体の階級の任務を鮮明にしなければならないのである。

このような観点に立つて、我々は、個別経済闘争である学費闘争と、全人民的政治闘争との、結合の現在の環として、日帝によるなし崩しファシズム——階級解体攻撃との全面的対決を提起する。この日帝による、なし崩しファシズム——階級解体攻撃と我々の学費闘争との有機的連関関係は、すでにくり返し提起してきたことであるが、再度簡単に述べれば以下の如くである。即ち、学費値上げを強権的にしきると共に、現在の松山超反動体制の下で、学内における右翼的権力再編、学生の個への分断化——管理支配の強化として、戦闘的同大學生運動への庄殺攻撃(学生部を中心とした、学友会・自治会への敵対、サークルへの介入、廃寮化攻撃等々)を進めることをもって、同志社大学の田辺町移転——二部廃校——大同同志社構想を遂行せんとする同志社ブルジョアジーの攻撃は、筑波実質化——新大管法制定策動として、洋学協同体制——中教審、筑波路線の全面的完成化をなさんとす

る日帝ブルジョアジーの教育戦略——教育の帝国主義的再編化攻撃の

別経済闘争の全人民的政治闘争との結合と、自然発生的闘争の目的意識的闘争への転化という課題が、我々に提起されてくるのである。では、かかる課題は我々の学費闘争の現段階に於いて、如何に総括と任務の提出の作業の中で、物質化されなければならないのか。我々の学費闘争は、前述した如く、当局——権力との全面対決の次元に突入した。しかしながら、この「全面対決」は、現段階に於いては運動の圧倒的な自然発生的展開により、同大当局との全面対決が闘い取られているにせよ、権力との対決の次元に於いては、まだ一面的な「全面対決」であり、全的な真の意味での「全面対決」ではない。即ち、まだ真の内的質を有した、権力との全面対決には至っていないのである。現段階に於いては、当局を即自的な媒介にした、権力との外的な一面対決でしかないのである。このような段階に於いて、ストリートに政治闘争との結合・転化を語ることはできないし、かりに語れば、そのような政治闘争は「一般的政治闘争」であり、小さくまとまった「行政的政治闘争」の、自己目的としての追求にしかすぎず、また運動局面に於いては、大衆運動に対する「引き直し」として機能することは、前述した通りである。このような「行政的政治闘争」は、経済闘争、政治闘争という、重層的な内実をもった、革命的権力闘争を導き出すことはできないのである。

レーニンは次の様に語っている。「マルクス主義者は、どんな政治行動をとるにあたって、階級勢力との相互関係を、厳密に、客観的に考慮に入れなければならない。我々が立脚しなければならぬのは、まさにこの様な立場である。即ち我々は、現時点の学費闘争の運動局面に於いて、一個別経済闘争としての学費闘争が、全人民的政治闘争との真の意味での結合を、為し切るためには、我々が学費闘争を同大明確な一環であり、また、この教育の帝国主義的再編化攻撃は、現在の日帝によるアジア侵略反革命の全面的な貫徹に向けた、侵略反革命体制の構築の攻撃の主要な軸である、国内の帝国主義的再編——上からの階級解体——なし崩しファシズム化攻撃の一大重要環を占めるものである。まさしく、IMF——GATT体制の崩壊をメルクマールとして突入した、帝国主義的世界経済体制の動揺は、同時に、現段階における帝国主義的収奪攻撃の中軸である、第三世界に対するモノカルチャア的単一経済機構の強要——新植民地政策の下で、一切の犠牲と抑圧を強要されてきた、第三世界人民の闘いが、ベトナム——インドシナ人民の英雄的な闘いに主導され、全世界的な第三世界民族解放武装闘争の革命的前進として爆発し、この闘いと固く連帯せんとする帝国主義本国におけるプロレタリアートの闘いは、現在の国際階級闘争の三ブロックへの閉塞性を突破せんとする世界プロレタリアートの国際主義的団結の中で結実化され、かかる闘いの前進は帝国主義的世界戦略の重大環——アジアにおけるアメリカ帝国主義の一元の支配を軸とした従来の侵略反革命体制を打ち破ったのである。このことをもって、必然的なものとされた、アジアにおける帝国主義的侵略反革命体制の再編を、帝国主義者は、日帝をアジアの盟主として登場させることをもって、日米両帝国主義による侵略反革命同盟の強化としてなさんとしているのである。そしてこのための日帝の死活をかけた攻撃の現在の進行が、アジア侵略反革命に向けた、国内外における帝国主義的再編——なし崩しブロック化となし崩しファシズム化攻撃として機能しているのである。かかる日帝によるなし崩しファシズム化攻撃は、現在の日帝の有する国内外情勢の流動的動揺局面への突入と、このための階級情勢の尖鋭化に伴い、自らの死活の問題として全ゆる人

民に対する上からの階級解体の総攻撃として加えられているのである。この日帝による、なし崩しファシズム——階級解体攻撃と全面的に解決し、日帝の侵略反革命体制を粉砕し、日帝打倒——プロ独樹立を闘いとする道は、プロレタリアートの階級形成を、日本階級闘争を領導しぬくプロレタリアの階級的・革命的・前衛的結合体の目的意識的な建設の作業の中で闘いすることであり、このために、社会排外主義、階級協調主義、帝国主義社民、更には、現在数多く機能する経済主義、精算主義潮流との徹底した党派闘争を強化する中で、彼らを、理論的実践的に粉砕しつつ、混迷せる革命的左翼と日本階級闘争の再編をプロレタリア国際主義と組織された暴力」の旗の下、プロ独派の革命的ヘゲモニーでもって貫徹することであり、同時にこの闘いの前進の中で、日帝のなし崩しファシズム——階級解体攻撃に全面的に屈服せんとする新旧人民戦線派との明確な分岐を勝ち取ることである。この、なし崩しファシズム——階級解体攻撃と絶対対する日本階級闘争の重大な任務に対し、我々学生戦線は、如何にして答え得るのか。このための唯一の道は、すでに提起した如く、打ち続くブルジョア反革命の攻撃を全力で突破し、更なる闘いの高揚に向け再度我々学生戦線の階級的任務を鮮明にする中から、内部階級闘争を通じて我々の戦線の純化と強化を、学生戦線の内部に共産主義を組織する任務の目的意識的な追求の中から貫徹し、学生戦線の革命的団結と再編強化を成し切り、70年代中期階級攻防戦の戦場で、73・74春闘の戦闘の高揚においても見られた様に、一切の従来の「指導」のワクを乗り越えて階級闘争の前面に進撃せんとしているプロレタリアート階級人民との革命的結合を、断固として闘いすることである。

71年学費闘争を全国最先頭で革命的に闘い抜いた同大学生運動は、を、あげることができるだろう。とりわけ、後者に於いて、不断に自然発生的な大衆運動として発展する、個別経済闘争である、教育学園闘争の中に於いて、組織的な任務を大衆運動の延長線上に志向するということは、徹底した組織日和見主義であり、結果に於いては、大衆運動に対する指導と任務方針の提起を放棄し、大衆運動の名を借りた、大衆追随主義と経済主義に陥り、最終的には本来向自的なものである組織的任務を、即自的なものにすりかえることになり、これの最悪の形態が、この学生運動総体に於ける組織的任務を、現在の日帝による侵略反革命体制の下での、即自的な階級矛盾から自然発生的に成長した、他の領域に於ける個別経済闘争的な「政治闘争」の戦術的な任務に、ひきうつしのにすりかえることをもって、教育学園闘争からの逃亡と、革命的學生運動の精算主義的解消という、個別闘争の「たこつば」運動なのであり、同時にここに於いて、前述の「学生存在基盤の解明」という同大学生運動の提起は、このような立場に墮落した諸君によって、学生存在の質的規定性を、学生存在の小ブル性にも二重写しにし、かかる学生存在の小ブル性↓小ブル性の精神主義的「止揚」——自足的な自己修養として、観念から情念の次元に至る、永遠の主体形成の円周運動と、それによる、組織の同心円の拡大という、革マル主義に落としこめられてしまうのである。我々が、同大学生運動のこの様な否定的側面を明白に見つめ、今回の学費闘争を革命的に闘い抜く中から、貫徹しなければならぬ任務は、何よりも大学共同体という限定的枠を、個別教育学園闘争の領域に於ける学費闘争を、全人民的政治闘争との結合を闘い、突破することであり、この闘いの中で日本階級闘争の重大な任務と、学生戦線に共産主義を組織するという、学生戦線の個別的任務との、有機的連関を踏まえつつ、

その総括の作業の一つとして、かつて60年代後期における全国学園闘争の中で全共闘運動が学生運動の革命的戦闘性を復権し、革命的左翼のヘゲモニーの下、圧倒的な学生大衆を70年安保闘争を軸とした一大政治闘争の高揚の中で、学園から街頭へ進撃させつつも、全共闘運動の個別性・自然発生性の限界を突破できぬまま、密集したブルジョア反革命に敗北していったという全共闘運動の高揚と敗北の総括を踏まえながら、革命的學生運動を担いぬく学生戦線の質的飛躍の水路として「学生存在基盤の解明」という問題提起を、個別教育学園闘争の全人民的政治闘争との結合という課題の環の一つとして考察する中から行い、これを現実の運動局面においては、「教育学園闘争の徹底化」として表現した。しかしながらかかる問題提起が含まれていた一つの致命的欠陥ともいえる、組織的任務の欠如は、その後の闘いの過程で明らかかな否定的現実——教育学園闘争からの逃亡と革命的學生運動の精算という立場——を同大学生運動の体内から発生させてしまった。ではこのことは、如何なる理由からなのか。

我々は、この問いかけに対する答えの一つとして、前述の様な提起を同大学生運動が行ない、尚かつ71年から72年に至る沖繩——三里塚闘争を軸とする戦闘的政治闘争を革命的に闘いつつも、教育学園に於ける闘いが「教育学園闘争の徹底化」として抽象的にしか語られず、その必然的結果として、教育学園闘争が、いわば大学共同体という個別教育学園空間の限定的ワク内において、政治闘争との結合が一面的にしか語られなかつたこと、そのため現実の闘いを担い切る保障的な前提として存在する同大学生運動の組織的な任務が、教育学園（それも大学共同体という市民社会的な限定的ワク内における教育学園闘争）という、一つの大衆運動の延長線上に直線的に志向されたということ

その様な重層的な内容をもつ、学生運動総体の階級的任務を鮮明にしつつ、同大学生運動の質的、組織的飛躍を、現在提起されている重大な課題の一つである、日本階級闘争に対する過去に於ける、多分に自然発生性に依存した、いわば運動論的把握から、70年代中期階級攻防戦を担い切る、プロレタリア解放の前衛組織を建設する、明確な組織論的把握への飛躍という、日本階級闘争の総体的な任務との、有機的連関を捉えつつ、断固闘いすることである。このための、我々の学費闘争の全人民的政治闘争との結合と、大学共同体という、個別の限定的枠の突破の現在の環が、前述した如く日帝のなし崩しファシズム——階級解体攻撃との全面対決であり、この闘いと、当局——権力との全面対決の質的深化という、学費闘争の現在の任務を、学費闘争の革命的展開の中で、断固として闘い、行かなければならない。これが、学費闘争と同大学生運動の革命的前進の道であり、我々が進むべき道なのである。学費闘争勝利！ 同大学生運動の組織的飛躍をかけて、共に闘い抜こう！

全ての学友諸君！ 以上のような学費闘争の現段階に於ける中間総括を踏まえ、学費闘争の今後の任務として、以下のような包括的な行動方針を提起する。

- 一、我々は当面以下のようなスローガンでもって闘う。
- 四月前段決戦勝利！ 五・六月同大大激戦を断固闘い抜け！
- 75年学費値上げ実力阻止！ 学費値上げ白紙撤回！
- 松山体制打倒！ 反動的な大権力機構解体！
- 田辺町移転——二部廃校——大同社社構想粉砕！
- 74年学費値上げ——入試強行糾弾！ 全学休講措置——レポート切りかえ糾弾！

○サークル・寮への介入粉砕ノ 学生部解体ノ

○教育の帝国主義的再編——中教審・筑波路線粉砕ノ 筑波実質化阻止ノ 新大管法制定策動粉砕ノ

○日帝の侵略反革命——なし崩しファシズム・階級解体攻撃と絶対決し、同大学生運動の革命的前進と学生戦線の圧倒的飛躍を闘い、れノ

○学費闘争勝利ノ

二、全学実行委を結果軸に、諸戦線の強化を、内的な質の深化をはかりつつ、勝ちとらなくてはならない。

三、革命的敗北主義、決戦主義は、広範に決起している学生大衆に対する指導を放棄することであり、更に限定された個別経済闘争である学費闘争の枠の中での、サンディカリズム的傾向であると、学費闘争の現段階の発展に於いては結論づけられるが故に、批判しなければならぬ。

〈資料 No. 2〉

76年2・5全関西総決起集会基調

主催・同大全学闘

関西大連合戦線

秋期闘争以降の我々の闘いは、経済主義・精算主義潮流との党派闘争として貫徹され、厳冬の闘いは我々に更に重要な任務を突きつけている。

全ての同志諸君!!

9・30天皇訪米阻止闘争をメルクマールとした現代沼地派に対する党

革・人民戦争路線の限界性を突破できず、その世界戦略をソ連に対する防衛網建設にその重心を置き換えてきている。この事により、帝国主義の侵略反革命体制との武装闘争を担う後進国階級闘争、大陸革命を領導し得ず、かえってその分散化を招いている。こうした国際階級闘争の現局面において、先進国革命派に問われていることは、60年代後半の革命的左翼の敗北がきっかけた権力問題を精算し、資本制生産様式の諸矛盾が生み出す様々な自然発生性を単なる侵略反対運動へと横流しすることではなく、権力問題を対象化し、分散する大陸革命派を統合する基準を提出し、世界プロ独へ突き進むことである。

中国共産党の文革——人民戦争路線は、帝国主義内部の階級闘争を領導し得る革命戦略を提示しえないという決定的弱点をもちつつも、ソ連が米帝との平和共存をもって民族解放闘争に対して抑圧的立場に立った事に対し、民族解放闘争を世界革命の有機的一環と位置付けたが故に、インドシナを初めとする60年代の民族解放——社会主義革命戦争を領導しえたのである。しかしながら、帝国主義内部の階級闘争を領導し得る革命戦略を提示しえず、自力更生、相互内政不干涉||自主独立の党を原則として主張する中国共産党は、世界党建設をめざしつつ解体したコミンテルンの歴史的限界性を突破しえなかつた。コミンテルンは世界党をめざしつつも、ヨーロッパ各国支部に流入する組合主義を世界党の組織性へと解体できず「各国の連合党」へと解体され、ヨーロッパ革命の挫折、NEPという後退期を新たな世界革命戦略に結びつけることに失敗し、帝国主義の包囲網に対するプロ独の防衛という観点からのみ政策が決定され、一國主義||スターリン主義を生み出していったのである。

帝国主義の侵略反革命、スターリン主義の武装反革命と対決する国

派闘争の意義はより鮮明になってきている。

まさに、現代沼地派の諸君はマルクス・レーニン主義を口先だけの認識一般へと落し込め、民主主義闘争の寄せ木で自らの延命をなさんとし、現下の階級闘争、マルクス・レーニン主義とは全く無縁なものへと純化しつつある。我々は、かかる部分に対して決然たる態度をなし、彼らの大合唱に惑わされることなく闘い抜かなければならない。

我々は何から始めるべきかノ何を為すべきかノ かかる問いかけを自らに発し、闘いを準備することを放棄し、情勢一般の変化をあれこれ指摘したり、お喋りに終らしめておくことは、まさに笑うべきことであり、全く無力であることは明白である。

我々にあるのは、如何に階級闘争の前進を克ち取るのかノ如何に共産主義運動を止揚するのかノである。

明確に60年代後半の革命的左翼の意義と限界性の止揚克服としてある現在の我々の闘いは、その前途に様々な困難が横たわっているが、我々は一丸となって闘い抜き着実な前進を遂さなければならぬ。

60年代後半の革命的左翼は「プロレタリア国際主義と組織された暴力」の二大基軸の下、67年10・8羽田闘争以降、国家権力との全面対決を為していったが、我々が明らかにした様に、その運動・組織論の不充分性故に後退を余儀なくされていったのである。我々がかかる急進民主主義的態度を断固突破し、彼らが提出した権力問題に規定された闘いを展開しなければならず、その闘いこそが国際主義の内実を深化せしめる闘いなのである。

今やベトナム革命戦争の勝利をうけて後進国階級闘争は、帝国主義の侵略反革命軍事体系に対する武装闘争——内戦として進展しつつある。これに対し、60年代の民族解放闘争を領導した中国共産党は、文

際階級闘争は、中国共産党にコミンテルンの総括、帝国主義内部の階級闘争を領導しうる世界党建設に向けての闘いを要請していたのであり、これを抜きにした中では、中国共産党内部のプロ独防衛——国内経済建設からのみ政策をたてるという傾向を根本的に克服することが出来なかつたのである。こうした中国共産党の民族共産主義としての限界性は、現在の中心的戦略である「社帝主敵論」を生み出した。「社帝主敵論」はソ連に打撃を与える為に一切を動員する一種の「主要打撃論」と米・ソ以外を味方と規定し（三つの世界論）、対ソ防衛の為に欧州・日本・東南アジアにおける「中間地帯論」のウルトラ化（安保支持・EC支持・ASEAN諸国への接近）・米中接近として現われている。このことは、ヴェトナム労働党のソ連への傾斜（10・81）声明）タイ・マレーシア共産党の分裂を引き起こした。更に、アングラに於いて、当初はFNLAを支持し、完全な内戦状態への突入下でMPLAがヴェトナム・キューバ等の承認を得るに至って介入を打ち切り、「ソ社帝がMPLAだけを援助介入し内戦を引き起こした」と非難しつつ、民族自決権の主張、三派の団結を求める声明を発表した。このことは、中国共産党の「社帝主敵論」では、新植民地主義を支える米帝、南アフリカの反革命軍事同盟に対する武装闘争——内戦へと進展するアフリカ内部の階級闘争を領導しえないことを明らかにしている。このように中国共産党の文革——人民戦争路線から「社帝主敵論」への世界戦略の重心の変更は、中国共産党の民族共産主義としての限界を克服するものでないばかりか、大陸革命派を分散させてきているのである。

こうした中国共産党の「社帝主敵論」の破産の顕在化——大陸革命派の分散化という国際階級闘争の現局面に対する毛派に屈する精算主

義者の沈黙が意味するものは何か？ 彼らが毛派に屈服する根本原因は、権力問題を精算する自らの立場を中国共産党に依拠する事によって合理化してきたのである。民主主義闘争を徹底して闘い、階級形成を行ない、蜂起を展望するという、二次BUNDの階級主体・党道具論が反政府闘争→大衆実力闘争・権力闘争へと登りつめても、権力の破防法攻撃の前に大衆武装闘争を封殺され、経済主義を発生させていったという限界性の総括を一切回避し、中国共産党の「人民の海論」に依拠した統一戦線戦術をもって党建設の道とするのである。中国共産党の「人民の海論」は日帝とそれと結ぶ大ブルジョアジー、大土地私有者に対する労働者、農民、小Brの統一戦線成立を前提としているのであり、Brイデオロギーの圧倒的流布・改良主義・組合主義がプロレタリアートの多数を未だ支配しているという日本において、これらとの党派闘争を抜きにした統一戦線が改良主義の沼地をなすということとは、天皇訪米阻止闘争をめぐる彼らの反ファシズム統一戦線を見れば明らかである。そして彼らは中国共産党の世界戦略に依拠した世界戦略を提示するのであるが、そのことにより「社帝主義敵論」の破産→大陸革命派の分散を一切対象化しえないのである。この事は、彼らが国際主義を如何に語ろうとも、それが口先だけのものであり、国際反革命軍事体系との対決を一切放棄し、組織延命のみをはからんとしていることを暴露している。そしてこの精算主義者と結びつく関西にいたるまで、まだ果敢改良主義者は学費→反侵略・抗日連帯として自らの改良主義を隠ぺいせんとしている。しかしながら、彼等の主張が、分散化する大陸革命派を統合する基準を闘いとる事に対して一切無縁であり、彼らの学費→反侵略・抗日連帯運動が、国際反革命軍事体系解体へ向けた闘いへと結びつけられることなく、ブルジョアジーに対する抵抗

再建を訴えていた。これらツインメルワルト多数派は社会排外主義潮流との分岐の不明明、帝国主義戦争に対して単に平和を対置するといった大きな限界性を持っていたのに対して、レーニンがカウツキーらの社会排外主義潮流との徹底した分岐、帝国主義戦争の内戦への転化として、世界党建設、世界革命へ向けて一步前進しえたのである。しかしながら、カウツキーらの第二インター諸派と明確に分岐しえたのが、ようやく第二インター諸派の社会排外主義への転落が明確となった第一次帝国主義戦争突入後であり、世界党建設を主張する部分はロシアボルシェビキ以外には殆んどなく、レーニンが世界革命に向けた国際共産主義運動の組織化に着手することができたのはロシアにプロレタリア権力が樹立された10月革命以降であり、こうしたレーニンの歴史的限界性は1912年の欧州革命期が革命党の不在として「組織される蜂起」に終る現実的条件を形成したのである。とりわけドイツに於いてはプロレタリア兵士のたびたびの武装決起、社会民主党との党派闘争軍部、ファシスト勢力の抬頭→武装反革命の前に敗北していったのである。すなわち、コミンテルンに加え条件23ヶ条を中心とする中央集権化がドイツ共産党を「革命党の質」をもつまでに高めあげる事に失敗し、コミンテルンが最も革命的であった一九二〇年に於いても、第二インターとの革命的分裂を非合法活動の必要性として、階級の危機の内乱への転化を要求していた時期に於いても、コミンテルンが提起したのはツァー専制下に於けるレーニンボルシェビキ党建設の教訓にとどまっておらず、復活する国際反革命軍事体系に対して、全世界の階級闘争をロシアのプロ独権力を中心として、「Prの単一の軍隊」へまとめあげることには敗北したのである。このレーニンの歴史的限界を指摘したうえで、我々は改良主義者の学費→反侵略、抗日

闘争にとどまるという彼らの改良主義としての本質を暴露しているのである。

「経済闘争は、政治的煽動のために最も広範に適用しうる手段であるとか、今日の我々の任務は経済闘争に政治性を与える事であるなどという主張は、我々の政治的任務の狭い理解をあらわしている。」まさに改良主義者は学費闘争をめぐって自らの改良主義の本質を隠ぺいせんと経済闘争に何らかの政治性を意味付与し、いかにもその闘争が「革命的」であるかのようにふれまわる事に躍起となっている。彼らは我々が過去の共産主義運動の総括視点に立ち、様々な闘争をめぐって現われる他階級の尖兵との党派闘争を通じ、自然発生性を組織するという共産主義政治の任務などは縁もゆかりもないブルジョア・イデオロギーの範ちゅうでの闘争のみを自らの任務としているのである。「政治にもいろいろあるというものだ。彼らは政治闘争についてもこの闘争の否定というよりはむしろこの闘争の自然発生性への無意識性への拜跪を示している。」レーニンが指摘したように経済主義者が「労働運動そのものの中から自然発生的に成長してくる政治闘争（より正しく言えば労働者の政治的願望と要求）を完全に承認する」が、労働者にとって身近かな「雇い主と政府に対する経済闘争」を主要な任務とし、社会民主主義的政治などは現実には念頭になく、彼らの経済闘争が社会民主的政治とは何ら結びつかないものであったのに対し我々は学費闘争をめぐる改良主義者に対する態度を更に明確にしておく。

第一次帝国主義戦争の突入とともに、カウツキーらの社会排外主義への転落に対してレーニンはツインメルワルト・キンタールに左派・反対派を結集し、内乱、第三インター建設を主張したが、少数派であり、USPD、スバルタクス団を始めとして多数派は第二インターの

連帯運動がプロ独樹立と何ら結びつかない「組合主義的政治の狭さ」「組織における手工業性」を指摘せねばならない。

我々は、中国共産党の「社帝主義敵論」批判を通して、分散する大陸革命派の結合の基準を闘い取り、国際反革命軍事体系との対決へと全世界の階級闘争を「Pr単一の軍隊」へまとめあげることが問われており、学費をはじめとするBrの階級支配のあらわれに對する抵抗闘争もこのような闘いと結合されてはじめて巨大な意義を有することをはっきりと確認しなければならぬ。

我々は、かかる立脚点に立ち、現在まさに全国大学に於ける学費値上げに對し、個別反対闘争に押しとどめ、陥し込め、階級関係を一切不問にした改良主義、経済主義者の反動性を暴露しなければならぬ。彼らは60年代後半の革命的左翼が提出した問題を回避、否、精算した中において登場を為してきたのであり、歴史的共産主義運動とは一切無縁な代物である。彼らが幾らレーニンの言葉を用いようとも、それは階級闘争に對する全き無理解の証左であるか、愚弄であるか、更には傍觀者の言葉でしかあり得ない。

我々は、かかる改良主義、経済主義者の萬延している中に於いて（まさに萬延しているのだ）革命的左翼の任務として彼らの限界性を徹底して暴露し、批判しなければならぬ。彼らが民主主義闘争の徹底化を通じ、あるいはそれに様々な意味付与をなし、それによって現下の階級闘争が何らかの進展が克ち取れるかのように夢想しようとも、それは一切無力であり、更に彼らがその中で「改良の果実」を獲取しようとしても現下の破防法体制下に於いては決定的に不十分であるのは明白である。レーニンが第三インター建設に向けた闘いの中で社会排外主義者に対して断固として展開した党派闘争の意義を確認し、

まさにプロレタリア独裁に向けた闘いを教訓化するならば我々の任務は必然であり、又当然為し遂げなければならないのが、改良主義、経済主義者との党派闘争である。かかる内実こそが国際主義の復権を為すことであり、権力問題を更に鮮明にしうるのである。

我々の昨年2・6政治集会以降の闘いは、70年代初頭に登場した精算主義、経済主義潮流に対する分岐の作業であり、かかる部分との非和解的な闘いとしての党派闘争が我々の組織政治戦として打ち抜かれたのである。それは、秋期闘争に於ける我々の闘いが示した意義であり、我々は更に大胆に実践の中で闘い取ってきた権力問題と国際主義の内実を提起し、一切の躊躇を踏み越えて進まなければならない。改良主義、経済主義へと転落する部分を批判し、更に粘り強く闘い抜くこそが我々をより鍛え抜くであろうし、又我々の任務はますます重大になつてゆくだろう。

全ての同志諸君！

我々の秋期以降の闘いは今まさにその真の意義を提出している。60年代後半の革命的左翼が提出した問題は、一步一步解決されんとしている。が、とまれ我々は更に闘いを、まさにプロレタリアートの闘いを前進させなければならない。

全国大学に於ける学費値上げに対する闘いは、60年代の教育学園闘争の延長線上に設定し、その敗北の限界性を止揚することなしに、情勢一般のお喋りで勝利するものでなく、階級闘争の前進——勝利においてしか突破できないのである。改良主義、経済主義者達が従来の闘争の枠内で反対闘争を設定しようとも敗北は必然である。

我々は権力問題を国際主義に規定された闘いとして学費闘争を戦い抜かなければならないのであり、この内実こそが民主主義と階級闘争

を結合する環であり、共産主義運動へと高めあげる闘いである。

全ての同志諸君！！

全国の学費闘争を鮮明なる旗印——プロ独の組織・政治戦として、70年代後期の闘いとして、改良主義を粉碎して断固闘わん！